

「古道」の名残りに辿る、郷土大崎ヒストリア

過去から現在、未来へと受け継がれていく「ふるさと大崎」のDNA(原風景)を訪ねる「おさき今昔物語」。

その第二十八話は、江戸の昔より、人と物と文化の往来をもたらしていた「古道」の話。郷土大崎の歴史を紡いだ「道」の名残りを訪ねます。

とくに、繁栄を極めた「品川宿」から、往時の人々の参詣と物見遊山へのルートを広げた「碑文谷道」。私たちの暮らしのすぐ足元にあったその古道を辿り、「道沿いの歴史」を眺めます。



右は、天空へと伸びる大崎ウエストシティタワーズ。
左(トット文化館側)へ曲がれば、
ひっそりと大崎の歴史へつながる
碑文谷道が...



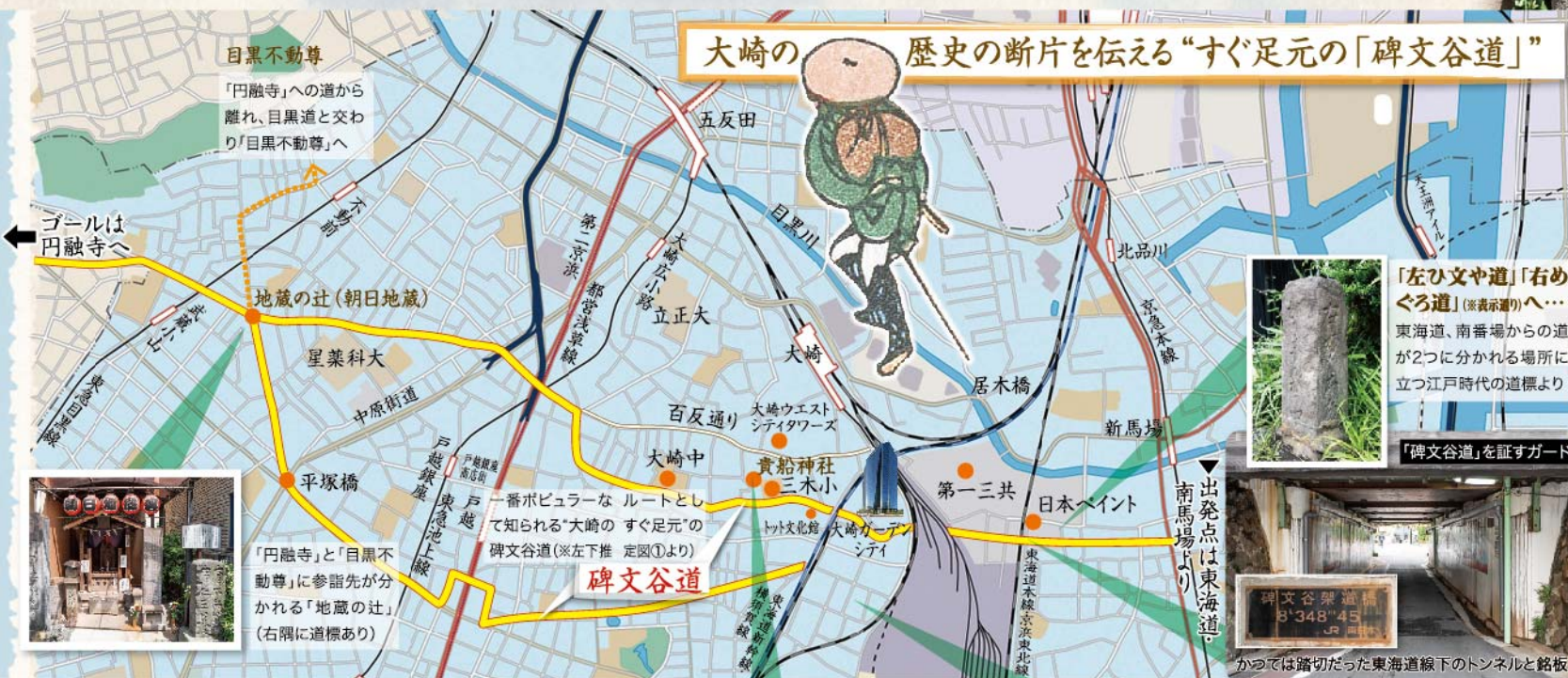
「右不動尊 左、仁王尊と
刻まれた地蔵の辻道標



碑文谷道のゴールとして賑わった天台宗「円融寺」(※江戸中期以前は日蓮宗「法華寺」)



「法華寺」から「円融寺」に変遷後、一大信仰ブームを呼んだ「円融寺の黒仁王尊」



大崎の歴史の断片を伝える“すぐ足元の「碑文谷道」”

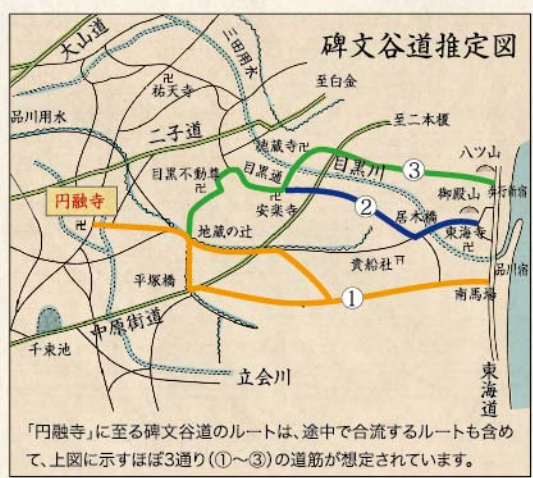
「左ひみや道」「右めぐろ道」(※表通り)へ...
東海道、南番場からの道
が2つに分かれる場所に
立つ江戸時代の道標より

「碑文谷道」を証すガード



かつては踏切だった東海道線下のトンネルと銘板

私たちが今暮らしている大崎のまちに、古くから縁の深かった「古道」、それが「目黒道」であり、「碑文谷道」でもありません。江戸時代より遊興の宿場町として賑わった「品川宿」から、さらに目黒不動尊(御不動様)や碑文谷円融寺(法華寺)の「黒仁王尊」へと足を延ばす多くの参拝客を導いたこの古道は、沿道に文化と経済発展の歴史をも育みながら、郷土の営みへの動脈となり、その名残りをまちに刻んだのでした。



「円融寺」に至る碑文谷道のルートは、途中で合流するルートも含めて、上図に示すほぼ3通り(①~③)の道筋が想定されています。

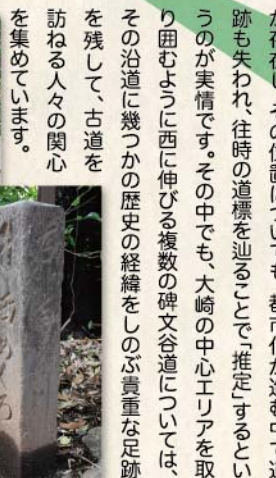
(※)本誌バックナンバー (http://ohsaki-area.or.jp/townguide/konjyaku/)

ヒストリア

トンネル内の標識が証す碑文谷道
「日本ペイント」の前からトンネルをくぐり、「第三共」前へと続く碑文谷道。JR東京総合車両センターの誕生によって直進はできず迂回ルートのみとなった今、東海道線をつくるトンネルに残された「碑文谷架道橋」の貴重な銘板(右、中段写真)が、真っ直ぐに伸びていた碑文谷道の存在を証しています。

ヒストリア

大崎の工業化を見守った碑文谷道
かつて向島百花園をも凌ぐ「大植物園・妙華園」(※)を足元に擁して、「国際自動車」、「大崎ガーデンシティ」へと続く大崎の歴史を訪いだ碑文谷道の入り口付近。この辺りはまた、明治時代の「日本ペイント」に続き、大崎の工業化を牽引した「荏原製作所」が大正時代に、さらに昭和には「明電舎品川工場」がその役割を受け継ぎ、碑文谷道沿いの発展の歴史に華を添えています。



創建1300年の「貴船神社」が古道を見守る
鳥居の裏にはかつての居木村と三木地区の境に建てられ、現在地に移転保存された道標(右)があり、正面に「西めぐろ、左右に「左北品川 右南品川」の字が刻まれています



一万坪もの花畑が広がる名所「妙華園」が、ほぼ碑文谷道沿いに...

大崎の中心部を開いてほぼ平行に伸びる「幾つかの碑文谷道」
江戸の昔より、多くの寺社参拝者を集める人気ルートとして発達した目黒道や碑文谷道。これらは出発地ごとに、また新たな支道の開発などによって多岐にわたるルートが存在し、その位置についても、都市化が進む中で道跡も失われ、往時の道標を辿ることで「推定する」というのが実情です。その中でも、大崎の中心エリアを取り囲むように西に伸びる複数の碑文谷道については、その沿道に幾つかの歴史の経緯をしのぶ貴重な足跡を残して、古道を訪ねる人々の関心を集めています。

※中央地図内に表記の碑文谷道の道筋については諸説あり、形状も厳密なものではありません。

■資料提供:品川区立品川歴史館、他